



社会童貞



旅田 暇

プロローグ

僕が就職できなかったとしてもそれは僕が悪いせいじゃないもん。社会が悪いんだもん。僕は前途有望な若者なんだもん。だからみんなは僕を明るい未来に向かって導いてくれないと駄目だよ。僕には無限の可能性があるんだから。さあ、ほら、早く僕に文明人らしい、知性にあふれる仕事とゆっくり趣味を謳歌できるだけの自由を持ってきてよ。早く。何してんの。

前書き

この小説の主人公は、私と同じく小説を書くのが好きな一人の大学生である。私と同じく文芸サークル（どのようなサークルか分からない人のために説明しておく、つまり、小説を読んだり書いたりするのが好きな連中が集う場所である）に所属している三回生だ。私と違うのは、例えば私には恋人はいないが、彼にはいるということだ。実に恨めしい。

彼の描く小説世界と彼自身の身辺雑記、そしてある種の統計的なデータが物語の根幹を為している。彼は幾つかの問題に人生を阻まれてしまっている。その問題の程度については個々人によって評価が分かれるであろうから、ここではあえて名言しないでおく。そういったことは、作中で本人による日記やメモ等々で明かされていくはずだ。彼が書こうとしていた小説のタイトルは『パレード』。理由はすぐにも説明されるだろう。

しかし、先に言ってしまうと、彼は結局『パレード』を完成させられなかった。それどころか、彼が仕上げられたのはいくつかの筋書きと作中エピソードに過ぎない。彼は途中で『パレード』の執筆に挫折してしまったのだ。そしてそのせいもあり、この小説は『パレード』とは一見無関係に思える、日記的内容がかなりの割合を占めている。

だが、本質的には決して無関係ではないだろう。『パレード』は迷走の挙げ句光を見いだすことはできなかったが、彼が散々に味わった、出口の無い環状の不幸と挫折を、外側から照らし出す事は決して不可能ではない。そしてそれこそ、この小説の存在意義であるはずだ。

二月十四日の日記

彼女が手作りのチョコレートケーキをくれた。形は少々歪だったけれど、とても美味しかった。いわゆる、本命のチョコレートを貰ったのは初めてかもしれない。

そういえば、中学三年の時にクラスの女子からチョコバットをもらったことがあった。それ自体は嬉しかったけれど、手渡された直後から「本命じゃないから！ 本命じゃないから！」と何度も何度も念押しされて割と辛かった。僕だって、流石にチョコバット一本で誤解するようなことは無い。

それはともかく、その後は適当にぶらついて分かれた。寒い上に平日ということもあって、繁華街もすいていた。大学生の春休みはいやというほど長い。恋人とも沢山会えるだろう。

家に帰ると、母親がまた自殺の真似事をしていた。三年前に鬱病を患ってから、これで何度目か分からない。今日は鋏を手首に突き立てて血管を切ろうとしていた。一応止めたけれど、止めなかったら本当に死ぬんだろうか？ ただ死にたがっているだけのような気もする。

三月三日の日記

彼女と二人でU S Jに行った。ほとんど地元と言ってもいいくらい近くにあるのに、行くのは初めてだった。まず目についたのが足が宙ぶらりんになるジェットコースターで、とりあえず乗れると豪語したものの、実際に乗るのは到底無理だったろう。彼女にその気がなくてよかった。

夜にはパレードがあった。パレードに関する小説を書こうと思っていたので良い資料になると思い、携帯で写真を撮りまくっていたらはしゃいでいるのだと勘違いされた。確かにテンション上がったのは事実だったが。

パレードを観るのは幼稚園の頃に東京ディズニーランドに行った時以来だった。華やかな電飾と腹に響く音楽の渦に居ると、なんとなく現実から遊離して幻想に近づいているような気がした。ただ、その分終わってしまった時の寂しさのようなものは半端無かったけれど。

最近あまり小説が書けず、妙な断片が頭を行き交ってばかりだったが、実際にパレードを観たおかげで何とか形にできるかもしれない。今日から考えてみることにしよう。

メモ1

パレード……現実と幻想の間に引かれた一本の線。その線を綱渡りのようにして行進していく人々。過剰な音響と装飾で幻想への接近を図る。そのクライマックスに観客は最も幻想に近い現実へ浮揚し、彼らが去っていくと共にゆっくりと現実へ戻っていく。

ただし、もしかしたらパレードの列に続いて歩いて行けるかもしれない。

三月二十二日の日記

何となくイメージは湧いてきたけれど、未だに形にならない。僕が観たパレードは華やかである一方で雑然としていたから、きっと色々なものがないまぜになった小説になることだろうと思う。

そもそも何故僕はパレードを題材に小説を書こうと思ったのだろう。確か、一月初め頃に見た夢が切っ掛けだったはずだ。場所は自分の部屋で、僕はベッドの上で仰向けに眠っていた。そう考えると、もしかしたら現実の出来事だったのかもしれないが、あんなことが起きるはずはないからやはり夢だったんだろう。気がつくと、背後から重低音の打楽器と高らかな管楽器の響きが降りかかってきた。しかし、当たり前なことだが背中の下はベッドだ。恐る恐る手でまさぐってみても、シーツしか無かった。しかし何かが怖ろしく、僕の視線は天井に固定されたままだった。

楽器の音は次第に大きくなっていった。まるですぐ隣で演奏されているようだ。身体の中が底の方から震動し、無理矢理心臓を動かされている気さえした。

不快感を覚えて目を閉じた。そしてその時、僕は何故かこう思ったのだ。そうだ、これは『パレード』なのだ。

その瞬間、僕の身体はベッドから繁華街の道路に移動していた。ネオンライトが陽炎のように揺らめき、暗い空を覆い隠している。目の前には誰も居なかったが、相変わらず背後から音楽が聞こえていた。振り返ると、『パレード』の先頭が今まさに歩道橋の下をくぐり抜けたところだった。

僕はじっと佇み、彼らが此方へやって来るのを待った。彼らのパレードはU S Jのそれとは違い、大掛かりなオブジェクトは使われていなかった。ただ、人間ばかりの長蛇の列が延々と続いていた。彼らはそれぞれ激しい色彩の奇抜な衣装に身を包み、手には楽器や指揮棒のようなものを持って行進していた。

何より不思議だったのは、彼らが全員、仮面をつけていたということだ。パレードには老若男女、それこそお爺さんからやっとなりで歩けるようになったばかりの子供まで参加していたが、彼らは全員、錆び付いたような色の、歯車の形をした仮面をかぶっていた。

彼らはゆっくりとした足取りで僕に迫ってきて、やがて脇をすり抜けていった。僕は騒音の檻に閉じ込められたような錯覚を感じた。彼らの演奏は、一つ一つの音には美しさがあるように思えるものの、全体を聴いたときにどうしようもない不協和や歪みばかりが目立ってしまった。意識がグラングランと揺さぶられ、時間と平衡の感覚が失われていった。

気がつくと目の前にパレードの最後尾が居た。ようやく通り過ぎたらしい。僕は大きくため息をつき、彼らを見送ろうとしたところで、最後尾を歩いている小学生ぐらいの子供が此方を振り返り、僕を見つめていた。仮面のせいで表情は分からないが、僕には「ついてこないのか」と訊いているように感じられた。僕は緩やかに首を振って否定した。彼らについていく理由は微塵も無かったからだ。

子供は僕の仕草を見て、小刻みに首を動かした。嘲笑でもしているようだった。そして彼はパレードの列に戻っていった。

僕の夢はそこで終わった。気づくとそこはベッドの上で、もうすぐ夜明けという時間だった。そう、あれは確かに夢だったのだと思う。だからといって、何かを暗示しているわけではないだろう。夢というのはそれほど都合の良いものではないはずだからだ。しかし、本当に何の意味も無かったのだろうか。

一つ確かなのは、あの夢のおかげで僕の中に『パレード』というイメージが消えることなく固着したということだ。

四月十八日の日記

大学が始まった。もう三回生になったわけだが、始業式や終業式があるわけじゃないからいまいち自覚が湧かない。しかし、今年は嫌でも自分の身分を自覚させられるイベントがある。就職活動だ。何でも大卒の就職率が頗る悪いらしく、特に私立大学の文系などは危険らしい。僕は私立大学の文系に所属している。

しかし、そもそも何故大学三年の段階で就職活動などしないといけないのだろうか？ ようやく今年からゼミが始まったところだというのに。僕は大学に入学したつもりであって、就職予備校に入ったつもりは無かったのだけれど。

何を言っても始まらない。恋人も僕と同回生だから、今年から就職活動をする。二人でなら何とかなるかもしれない。公務員になるのが一番安定していて良いそうだから、とりあえず目指してみることにしよう。

それより気がかりなのは母親のことだ。最近、死にたがりの衝動がより激しくなっている。昨日は包丁を首にあてがい、僕が止めようとするのを振り回して暴れていた。医者には、あまり酷いようなら入院することも薦められているらしい。しかし母は拒否しているようだ。それはそうだろう、死にたがりが死ねなくなる病院を選ぶはずがない。

メモ2

この国の自殺者は一年で三万人を超える。だいたい、十五分に一人が死んでいる計算となる。この国の一年間の死亡者数はおよそ百十万人だから、小学校のクラスが一つあれば、そのうちの一人は、将来自殺で死ぬことになる。自殺者のうち七割は男性。男性に限ると二十五人に一人が自殺で死ぬ。

本編への挿話1

ある小さな惑星でパレードが始まった。惑星の住人はパレードに命を賭けており、一度始まったら最低でも一年は行進し続けなければならなかった。加えて今回は遠い宇宙で滅亡した惑星の住人達が難民として流れ込んできたため、一際盛大なパレードになることが予想された。

難民の中にコウとイツという名前の男女がいた。若い二人は難民達と原住民との調和を図るためという理由で真っ先にパレードへの参加を余儀なくされた。

ところが、何の手違いか、コウはパレードの先頭に、イツはパレードの最後尾に配置されてしまった。二人は慌てて一緒になるため移動しようとしたが、一度パレードに入ったら隊列を乱すことは許されていない。最初は少ない人数だったパレードも、やがて数百人、数千人とその数を増やしていく。しかも後からきた人々は好きなどころから参加できるため、二人は遂に離ればなれとなってしまった。これで二人は最低一年は会えなくなってしまう。あまつさえ、今回のパレードは何時にも況して長く続くことが予想されていた。

先頭を歩くコウは深く悲しんでいると、隣を歩く原住民が彼にこう言った。

「この惑星は小さいし、パレードは陸続きになっている場所を、円を描くようにして歩くことになっている。ここ最近、惑星の住人は爆発的に増えた。私たち元々の住人だけでなく、君達のように外からやってきた者がパレードに加われば、もしかしたらパレードの先頭と最後尾が繋がって、君は彼女ともう一度会うことができるかもしれない」

彼はその言葉に希望を見いだした。先頭の彼は一際大きな声で、主に自分と同じ難民達にパレードへの参加を呼びかけた。それは自分がイツに会うためのみならず、難民と原住民の友好を助けるとも考えたからだ。

やがて、ぼつぼつとパレードに参加する難民が増え始めた。彼らは最初は乗り気でないようだったが、そのうちに快活な調子で歩くようになり、手製の打楽器などを出鱈目に打ち鳴らしながら笑い声を上げて行進を楽しむようになった。

それはコウも同様だった。行進の列が膨れていくにつれ、彼は自分がこのパレードに参加していることに誇りすら感じるようになっていた。

そんなある日、遠くの方にパレードの最後尾がポツンと見えた。途中から参加しようとする者が多すぎて、後ろの方はほとんど立ち止まってしまっているらしい。コウは逸る気持ちを抑えてゆっくりと最後尾に近づいた。まさに、惑星を一周する一つの整った円が生まれる瞬間だった。コウは最後尾の人々に追いつき、そこに懐かしい後ろ姿を見た。

イツだ。

五月五日の日記

ようやくちょっとした筋書きが出来たが、これを膨らませて一つの小説にするには無理があるだろう。これは本編に挿入される細やかな小話か、或いは短編連作の一部分になる気がする。

出来れば八月の末には完成させておきたい。文芸サークルの、学祭に出す作品の締め切りが多分九月の下旬だから、早めに完成させて推敲するための時間をたっぷり取っておきたいところだ。大学に入学した当初は、一つの作品を一ヶ月程度で完成させられていた気がするのだが、最近では作品そのものの尺が長くなったせいか、完成までの期間も長引くようになってきた。それが良いことなのか悪いことなのかは分からない。たぶん、どっちでもないだろう。

ゴールデンウィークも今日で終わり。しかし五連休の真ん中に授業日があったせいで、いまいち休めた気がしない。公務員試験の勉強もちよくちよく進めているが、これがなかなか難しい。彼女とは結局、ほとんど会えなかった。

そういえばポケモンの新作が発売されるらしい。それを希望に生きていくことにする。

本編への挿話2

今より百年以上も隔たった先にある未来での話。

その日は年に一度のパレードの日。参加者は皆それぞれ自由な衣装を身に纏い、高層ビルの建ち並ぶ大通りを行進する。しかし行進を眺める観客はほとんどいない。時々歩道を行く人が足を止めてぼんやりと彼らを眺めるが、すぐにまた歩き去ってしまう。

それもそのはず、この日の主役は行進する者達ではなかった。実は、パレードの参加者は全員、人間そっくりのアンドロイド。生身の人間は一人もいない。では人間達は何をしているかというと、高層ビルの中にあるオフィスで仕事をしているのである。

遙か未来、すでに全ての労働が人間の手からアンドロイド達の手に移っていた。人間達は有り余る自由を謳歌できるようになったが、逆に言えば彼らは労働することを禁じられたも同然。人間達は次第に自由を持て余すようになり、規則に縛られる労働を求めるようになった。しかし、その頃にはもう、アンドロイドよりも遙かに低知能な人間達の手を負える仕事はほとんど無くなってしまっていた。そこで一年のうちの日だけ、人間達が自由に労働できる日が制定された。その労働は勿論アンドロイド達の仕事に支障を来さない範囲で行われる。例えるなら穴を掘ってまた埋めるという作業を繰り返すような、まるで無意味なものだったが、人間達は喜んで労働した。

その日は、アンドロイド達にとっての祝日とされた。祝日の名前は『人間の日』である。

六月一日の日記

講義中に教授が言っていたが、法学部のとある四年生のゼミで、まだ一人も就職が決まっていないところがあるらしい。法学部でそうなのだから、僕が所属している、はっきり言えば就職にはほとんど何の役にも立たない文学部などはどうなるのだろう。来年は今年よりも遙かに就職戦争が激化するとも言われているらしいし、不安しか湧いてこない。

幼い頃、僕の周りにいた大人は挙って僕に、夢を持って、希望を抱けといった。未来は明るい。将来は素晴らしい物だ。やがて大人になるというのは、とても幸せなことなんだ。僕は愚直にも彼らの言説を信じて生きてきた。未来、将来、そういったものが輝いているように思えた。

気付いた時にはもう、僕にはほとんど選択肢が残されていなかった。あの頃明るく描いていた未来に僕はいる。あの頃、希望に満ちあふれていると確信していた将来に僕はいる。周りを見回しても、何もない。何もない。

僕は大人達に騙された。しかし僕がその事に抗議すると彼らは言う。へえ、まだそんなこと信じてたんだ。馬鹿だな。さっさと夢と希望を捨てろよ。現実見ろよ。お前はどんな風にも大成できない凡百の一般人なんだから。

そして僕は岐路に立たされる。二つの道路にはそれぞれ、今まで考えもしなかった選択肢が刻まれている。「生きる？ 死ぬ？」

……でも実際、大学四年になっても就職が決まらなかったら、いつそのこと死んでしまった方が良いのかもしれない。

メモ3

パレード.....他人同士でも楽しめるイベント。モラトリアムのような楽しさが終わってしまう合図。クライマックス。ネオンライトの向こう側に透けて見える辛い世界。合法的な麻薬。人生の幕引きにも相応しい躁病的な世界観。時には社会を糾弾するデモ行進に変わることもある。暴動。ストライキ。人間らしさ。

ついていきたくてもついていけない時もある。

本編への挿話3

少年と少女は外界から隔絶されたドームの中で暮らしていた。二人はお互い以外の人間を知らない。彼らは何故その広いドームの中で暮らしているのか、そしてそれは誰の差し金か、彼らは知らなかった。ただ確かなことは、ある段階を迎えた時点で彼らは元の世界に帰らなければならないと言うことのみだった。その世界はドームのある場所とは別の次元にある惑星で、名は地球と言った。

彼らは物心ついた時から自律機能を持った複数の機械達に育てられた。機械達はそれぞれ自分の専門とする能力を持っていた。例えば命名機械はあらゆる存在に名前を付けることに長けていた。教育機械は少年と少女を、幼いときからずっと教育し続けてきた。

同様に、予言機械は未来を予測することが出来た。ある時、彼はヒステリックにこう予言した。

「もうすぐだ。もうすぐのことである。大きな大きな巨人が恒星の向こうからやってくる。恒星をどかして、まっすぐこの星に歩いてくるんだ。聞こえる、聞こえる足音が……。奴の魂胆は明らかだ、奴は野太い脚の肥大した踵でもって、この星を叩く、つまりは踵落としをしようと画策しているのである。恐ろしい、そんなことをされればどうなるか、これは簡単なことで、まずこの星は周回軌道から飛び出す、そう、無重力空間を下の方へ。その時、地表にうごめいている我々は真空に放り出されるのである」

予言機械の予言が間違ったことはこれまでに一度も無かった。故に他の機械達は早急に対策を打たねばならなかった。

何よりも優先されるのは少年と少女の安全だった。機械達は協議して、彼らを元々の世界、つまり地球へ帰すことを決意した。しかしここで一つ問題があった。教育機械によると、彼らはまだ規定されている成長段階を終えていないというのだ。そこで教育機械は質問機械と回答機械の処へ言った。質問機械は回答機械に、のべつ質問し続ける機械で、回答機械は質問機械の質問に、のべつ回答し続ける機械だった。教育機械が回答機械に、少年少女が地球で適応するために必要な最優先事項を問うたところ、回答機械は次のように答えた。

「それに必要なのは人混みに慣れることである。つまり二人は今まで自分達二人以上の人間を知らない。しかし地球には六十億以上もの凄まじき人間達が居住している。彼ら全員とコミュニケーションを取る必要があるわけではないが、それにしても人海というものに慣れておくことは必須である」

教育機械は二人に、人混みに適応できるよう巨大な仮想機械を使ったトレーニングを施すことにした。実行に際し、少年は教育機械に人混みとはなんなのだと尋ねた。教育機械はしばし回答に詰まった後で、こう答えた。「それは、多分パレードのようなものだ」

パレードと聞いて少年と少女は喜んだ。地球にそのような楽しいイベントがあることは、以前に教えて貰ったことがあったからだ。二人は仮想機械の体内に入り、いよいよトレーニングが始まった。

二人がまず感じたのは重苦しい熱気だった。人間が集まることによって起きる独特の気持ち悪さを二人は知らなかった。彼らの周囲には大量の人間が蠢いていて、それらは一定の方向に進行

していた。皆が一様に疲れ切ったような表情をしていて、それは二人が知っているパレードのイメージとは程遠いものだった。二人は自分たちの周りにはいるものが、自分達と同じ人間とはどうしても認められなかった。彼らはあまりにも不幸そうな顔つきで、最新式のデジタル機器片手に、まるで頭に回路を埋め込まれているかのような忙しなさと歩き回っているからだ。

仮想機械が作り出したバーチャルの人混みは、ほとんど完璧に地球のそれを再現していた。しかしその再現性の高さ故に、少年少女は自分たちが地球の社会ではとても生活していけないことを悟ったのだった。

トレーニングが終了し、仮想機械から出てきた二人は、予言機械が予言した巨人がやってくるまで、ドームの外に出ないことを決めた。機械達は二人に反対し、特に教育機械は大袈裟までに二人の決断を嘆き悲しんだが、彼らの意志が変わることは無かった。

少年は言った。「あんなパレードが地球で日常的に行われているのだとしたら、僕らにはとても耐えられない。僕らはずっと此処にいたい。そのせいで人生が短く終わってしまうのだとしても、アレよりはマシだと思う」

やがて、予言機械の予言通りに恒星の向こう側から巨人が現れた。巨人が脚を振り上げ、踵を落とすその瞬間まで、教育機械は二人の人生が自分たちと同時に閉じてしまうことを後悔していた。

「私はもう、ほとんどの教育を終えたはずだった」と、踵落としによる激しい衝撃で真空の方向へ吹き飛ばされながら、教育機械は思った。「私の中にインプットされている単元はもう、あと一つしかない。その一つが欠けているというだけで、二人は地球に適應することが出来なかったのか」

教育機械の意識野に最後の単元が大きく浮かび上がった。その単元のタイトルは『マニュアル』だった。

六月二十三日の日記

時々僕の中でどうしても膨らむ『自殺』という名の強迫観念。母親が精神的な病に蝕まれる遙か以前から、その感覚はあったような気がしている。ふとした瞬間に自分の死に様を想起しようとした時、まず真っ先に、崖の上から大海原に向かって自らの脚で飛び降りているイメージが容易に思い浮かぶ。

以前調べてみたところによると、この国の自殺者は三万人を優に突破していて、その数は老衰で亡くなる人よりも多いそうだ。自殺の機会は偏在しているということになるし、今や決して珍しい死でもない。実際、僕らの世代が死んでしまう、その最たる死因は自殺なのだ。

就職が決まらなかったら死んでやろうという事は前にも書いたけれど、今も割と真剣にそれについて考えている。それは割と良い提案に思えるからだ。この国は新卒の資格を失ってしまえばそれだけでまともに人生を終えられる希望のほとんどを閉ざされてしまうし、何より私大の文系卒ともなれば真剣にブルーカラーに属してしまうことも懸念せねばならない。そうならないために僕は最低限、安定した就職が出来るような大学を選んだつもりだった。その保証は、ちょっとした時代の行き違いで何処へともなく消え去ってしまった。あまつさえ僕には人並みのコミュニケーション能力があるわけでもなく、社会に出た後の自分が上手く生きていけるとは到底思えない。それならば学生生活という緩やかなモラトリアムの中で、我が人生を締めつけてしまっても良いのではないだろうか。

しかし、僕には死ねない理由もそこそこあるのだ。その最大の要因は、無論彼女にある。僕はいずれ彼女と結婚するのだろうか？ きっとするのだろう。そうすれば僕一人の問題ではなくなってくるし、願わくは彼女を養うというようなこともしなければならぬ。

彼女はよく将来を夢想する。そうすることが趣味なのだそうだ。彼女の将来像はそれこそ文字通りの夢物語で、今の時代には実現はとても難しいことなのだろうけれど、僕は出来ることなら彼女のイメージを具体化させてあげたいと思う。そうなれば当然、僕は死ねない。

しかし、死なない努力は出来ても生きる努力はなかなか難しい。消極性と積極性の違いだ。誰かのために生きることや誰かと共に生きていくことを決めたところで、将来に対するどうしようもない、嘔吐するような不安感が拭い去れるわけでもない。二つはぎくしゃくと同居し続ける。

メモ4

この国で、他殺によって亡くなる人びとはおよそ五百五十人である。なお、この数はおよそ六日分の自殺者とほとんど同じだ。

二〇〇八年の六月八日、ある男が秋葉原で七人を殺す事件を起こした。新聞やテレビは連日、このニュースで持ちきりだった。

しかし、何をそんなに騒ぎ立てる必要があっただろう？ 七人。たった七人。自殺者で換算すれば二時間分にも満たない。二時間半分の自殺者を執拗に騒ぎ立てるメディアがどこにある？

僕らがまだ幼稚園児だった頃、東京の地下鉄に神経性の毒ガスがばらまかれた。あの時何人が死んだだろう？ 十三人。自殺者に換算すると？ 三時間分とちょっと。

同じ年、兵庫県に震度七の大地震が襲いかかった。今でもその日になれば冥福を祈るイベントが行われ、テレビや新聞で盛んに報道される。ちなみにあの時、何人が死んだだろう？ 六四三四人。自殺者に換算すると？ 二ヶ月と数日分。

遙か昔、僕らがまだ影も形もなかった頃。大規模な戦争が起きて、広島と長崎に人類史上最凶の大量破壊兵器が投下された。あれから六十数年経ち、今や当時のことをまったく知らない人たちが死者の冥福を祈り、二度とこんなことが起きないよう、明日の平和を誓い合っている。ちなみにあの時、何人が死んだだろう？ 広島で約十四万人、長崎で約七万四千人。自殺者に換算すると？ 両方併せて約七年分。

本編への挿話4

いつからか、彼はパレードに参加していた。最早いつから歩き続けているのか分からない。ただ彼の周りにはいる人々が無心に歩き続けているから、彼自身もまた行進し続けざるを得ないのだった。

ある時どこかから爆発音が聞こえ、地面が震えた。振り返ると、後方で火の手が上がっている。彼は立ち止まり、声をあげようとしたが出来なかった。誰も振り返らず、そして誰もが沈黙したままだった。仕方なく彼も歩き続けた。

今度は前を歩いている男が突然体勢を崩して倒れた。男は長時間歩き続けたせいで完全に疲弊しきっていた。地面に伏した男を、後続の人間達は気にすることもなく踏み越えていく。彼も一瞬男に気を掛けたが、やはり立ち止まることも、手助けすることも出来なかった。しばらく歩き続けたあたりで、右隣を歩いていた男がボソリと言った。「ふん、ざま見ろ。俺たちは苦勞して歩き続けてるっていうのに、途中でへたばりやがって」周りの人間が暗い面持ちで頷いたので、彼も慌てて首を縦に振った。

パレードはいつまでもいつまでも続いていた。誰も、何のために行進し続けているのか分からなかった。彼がふと左を振り向くと、そこで歩いている男が何かを言いたげな表情をしている。彼は男に合図を送り、二人で一緒にこの事態を糾弾しようと伝えた。しかしその時、男の後ろにいた女が二人を指さし、叫んだ。

「この人達、反抗しようとしているわ」

二人はたちまち周囲の人たちに袋だたきにされた。傷だらけになって地面に叩きつけられた二人に、多数派が次々と罵声を浴びせかける。「これぐらいでへたばりやがって」「俺はこいつらよりもっと長く歩いている」「俺の方が苦勞している」「俺の方が」「俺の方が」「俺の方が苦勞していて偉い」

立ち上がる気力もなく、うつ伏せたままの二人を、後続が次々乗り越えていく。いっそのまま死んでやろうか、と思ったとき、彼らの頭上に拡声器のような機械が飛んできて、明るい声で二人に呼びかけた。

「さあ、もうすぐ貴方たちに輝かしい未来がやってきますよ。もうすぐですよ。生活は楽になるし、みんな幸せになりますよ。もうすぐです。だからそれまで、歩き続けましょう。あとちょっとの我慢です。死んではいけません。自殺はやめよう！」

二人は顔を見合わせた。男の方が立ち上がり、歩き始めたので彼も立ち上がった。そしてまたのろのろと歩き出した。

七月十二日の日記

母親と喧嘩をした。将来や就職に関することだった。親子でいくら会話をしたところで就職先が決まるわけでもない。僕の家庭には所謂コネと呼ばれるものは無いから、どこにも安全に人生を終えられる保証はない。そのことについて母親に様々な本心をぶちまけてしまった。母は母でヒステリックになっていたし、どうしようもなかった。

散々言い合いをした後、僕は自分の部屋に逃げるように戻って引き籠もった。こういう時、あらゆる他人との関係を一切断ち切ってしまうことになる。自分の部屋で一人きり、殻に閉じこもるような生活で人生を終えてしまいたい。日頃からインターネット環境と共生していると、そういう一生が不可能ではないような錯覚に陥ってしまう。今の僕はまだ社会に出ていないからこうして逃避できているわけで、大学を卒業してしまえば嫌でも社会、つまり外に出なければならなくなる。そしてそうならず、引き籠もったまま一生を終えてしまう方法もある。それが自殺だ。

極論、関係を持ちたい人間は彼女と、数人の友人だけで十分だ。それすら諦めてもいいかもしれないと思う。自分一人であらゆる物事を決められたらどれだけ楽だろう。それは一見、面倒な事のようにも思えるが、自分一人だけならば、する自由と共にしない自由もある。就職活動。しない。公務員試験の勉強。しない。単位取得。しない。大学卒業。しない。生存。しない。自殺。する。とても楽だ。

だが僕は良い意味でも悪い意味でも一人じゃない。今も彼女からメールが来たばかりだ。どうやら彼女は何らかの出来事に落ち込んでいて、僕に慰めて欲しいらしい。追撃のメールが来る前に、僕はさっさと返事を打ち込む。文章上で取り繕うのは得意だ。

七月十八日の日記

喧嘩した日の翌日、大学から帰宅すると母親が自殺していた。今回ばかりは未遂ではなく、最初で最後の自殺成功だった。

母は、廊下とりビングを隔てる扉の取っ手に紐を括り付け、器用な格好で首を吊っていた。すぐに一一九番へ通報したが、どうやらその時点で彼女は息絶えていたようだ。警察までもやって来て色々と事情を聞かれたが、特に何かを疑っているわけではないようだった。

通夜と葬式が終わって少し経ち、今に至る。僕よりも父親の精神的ダメージの方が大きいようだ。僕は一人っ子なので、この家には男二人だけということになってしまった。

……そう、母は死んだのだ。全く実感は湧かないが、つまりそういうことらしい。死んでしまった以上、僕の考えは間違っていたと言うことになる。母の自殺衝動が本物ではなく、ただのパフォーマンスなのだという考えだ。

しかし、ほんの少し負け惜しみを言わせてもらえば、僕は今でもパフォーマンス説を覆すつもりはない。だって考えてもみてほしい。本当に自殺したい人間が、扉の取っ手で首を吊るなどと言う不確実な方法をとるだろうか？ 僕には、今回もいつものように自殺未遂をしようとして、たまたま失敗してしまったようにしか感じられない。

だが、だからといって母がオオカミ少年的な馬鹿をしでかしたとは思いたくない。専業主婦であった母が何を精神的な負担に思っていたのかは最早知る術もないが、それが自殺しなければならぬほどの重みであったことは確かだと思わざるを得ない。

そして、極めて利己的に僕自身の問題へ転換するならば、僕の中の自殺という概念はより大きさを増した。それは、母の精神問題を軽んじていた罰なのかもしれない。でも、だからといって僕に何が出来たというのだろうか？ 就職さえ決まるかどうか分からない、まだ社会に産み落とされる以前の分際である僕に、運命とかそういうものは何を求めているのだろうか？ 平々凡々たる一人の人間に重責を担わせるという行為は、そんなに楽しいものなのだろうか。

七月三十一日の日記

月が変わる前に気持ちを切り替えてしまおうと、今日は父と二人で母の部屋の整理をした。その時僕は、筆筒の一番上の引き出しから茶色い封筒を見つけた。開けてみると、中に入っている一枚の紙には、遺書というタイトルがつけられていた。

僕はそれを見つけたとき、複雑な満足感とストレートな侮蔑的感情とに同時に襲われた。やはり彼女は自分の死をアピールしたかったのだ、自分は正しかった、という思いが満足感の要因であり、僕の想像通りに母親が動いていた事への、期待外れのような思いが侮蔑的感情を湧かせた。

しかし実際に封筒を開けて中身を読んだとき、僕の考えは一変した。僕はその遺書を、「面白い」と感じたのだ。そのせいで、本気の笑いを笑いさえた。冗談ではない。不謹慎だとも思わない。僕の頭の「面白い」という意見は至極真っ当で、また人が遺書を読んで当然抱くべき感情であるとさえ思う。

僕の予想は外れていた。母は別に死を誇張して書いているわけじゃなかった。それどころか、その遺書は母の死を、逆に酷く矮小に、ちっぽけな出来事ではかないように書かれていた。僕にはそれが面白かったのだ。こんな、箸にも棒にもかからない、身辺雑記よりも無意味な文章を遺書と名乗らせて、母親は自殺したのだ。

勿論、母親はこれを、僕たちを面白がらせようとして書いたわけではないだろう。逆に、僕たちが悲しみに暮れることを期待していたのかもしれない。その意味で、僕の抱いた感情は、幼稚園児の拙い演技に拍手をしてみせる大人達の反応に似ているのかもしれない。母親はこれを、曲がりなりにも死に片足を突っ込んでかいたわけだ。僕には、勿論そういう経験はない。今まで数多の小説で数多の人間を殺してきたが、それだって別に僕自身が死に囚われていたわけではなかった。あれはあくまでもフィクションなのだ。

僕には、こんな文章を遺して死ぬ母親の気持ちはまるで理解できない。前衛喜劇を観ているみたいだ。面白い。滑稽だ。だから僕は、この遺書を父親には見せなかった。こんなものを読んで、もしも父親が泣いてしまったら、僕はそんな父親にいたたまれない気持ちを抱いてしまうだろうからだ。

だが、普通の人はずうやって面白がり、笑う僕を不謹慎だと言って戒めたがることだろう。それはきっと、傍目にも明らかな障害者に対する常識と非常識の拮抗のようなものだ。

何にせよ僕の気分は高揚した。そのままの気分で近所のゲーム屋に行き、ポケモンの予約をしてきた。発売日は九月十八日。素直に楽しみだ。

遺書

『もう疲れた。静かな、ここではない場所に行きたい。生きてても毎日毎日同じ事をするばかり。何か楽しいことがあるわけでもないし、ほんの少しも幸せなんて感じない。こんなことなら死んだ方がましだと思う。これまで色々な死に方を調べてきたけれど、やっぱり、首を吊るのが一番楽しいからそうしようと思う。生きているのに疲れた。もう、五十年近く生きたんだから、十分だ。死んだら体重もなくなるし、悩み事もなくなる。遺書って何を書けばいいのかわからないけど、こんなものだろう。天国のお父さんとお母さん、今から行きますからね。』

メモ5

鬱病による自殺は、動機として健康問題として分類される。女性の自殺者の六割超が健康問題を原因に自殺しており、男性を合わせても健康問題を原因とする自殺は約半数である。

メモ6

もしかしたら誰も知らないかもしれないので言っておこう。駅などでよく耳にする『人身事故』という言葉。あれは、本当は『事故』ではない。驚いただろうか。真実は、『事故』ではなく『自殺』だ。朝の通勤ラッシュの時などに、現実を見るのが嫌になった草臥れた人間達が、何とはなしにぼんやりと、走る電車の前に飛び込むのだ。

ちなみに、そうやって死んでいった人には電車の利用者からこんな温かい言葉をかけてもらえる。「畜生、会社に遅れるじゃないか。まったく、人の迷惑を考えて死ねよ」「やった、これできっと試験の開始時間が遅れるぞ、ラッキー」

本編への挿話5

彼はある種の能力を持っていた。それは他の誰も持っていない、一種の超能力のようなものだった。しかし、彼はその事実自体は自覚していたものの、その能力が具体的にどのようなものなのかは分かっていなかった。

ある日、彼の母親が自殺した。勿論この国で自殺者はさほど珍しい存在ではないから、テレビも新聞も、どこも彼女の死を取り上げることはなかった。

彼は、人並み程度には母親のことを気にかけていたうえ、彼女の自殺に際して自殺に関する様々なことを調べてみた。その結果、彼が考えていた以上にこの国の自殺者数が多いことが分かった。老衰で死ぬ者より、自殺で死ぬ者の方が多いのだ。しかし、テレビや新聞で取り上げられる死は大抵が殺人だった。

彼は私憤と、そこからくる義憤の両方に駆られた。自殺は明らかにこの国の病理であり、それはもっと明るみに出るべきものだ。例えば、電車で飛び込んで自殺する人が後を絶たないが、何を思っただか世間はあれを人身『事故』と称する。国全体が、自殺から目を背けているような気がした。

彼はどうかして、この国の自殺を具体化したいと思った。つまり、大衆の目に触れる形で自殺をアピールするのだ。それこそが自分の使命であり、母親への手向けであるとさえ彼は考えた。

しかし、きっと自分が死んでもどうにもならない。それもまた一つの事故として処理されるのがオチだ。諦めかけた彼は、ふと自分に宿る未知なる能力を思い出した。そうだ、自分には『何かができる』。それが『何か』は分からない。しかし、『何か』は『何でも』かもしれない――

そうして彼はある計画を思いついた。自殺という問題を人々の意識に浮上させるには、やはり自殺者を目の当たりにさせたほうがいい。それも一人ではなく、過剰なまでの数で表現しなければ、誰もがすぐに忘れてしまうだろう。

彼は能力を使って、千人の自殺者を空から降らせることにした。それだけの数を局所的に降らせれば大ニュースになる。そして彼らが全員自殺者だと判明すれば、きっと社会問題になるだろう。そうすれば、誰もが自殺に強い関心を持ち、あわよくば自殺者を減らすことに繋がるかもしれない。

それから、彼はひたすらに自分の能力が発現するのを待った。そしてある日、遂にそれは発揮された。彼は異常な妄想狂ではなかったのだ。

しかし空から落ちてきたのは生身の人間ではなく、マネキンだった。それは確かにニュースにはなったが、クローズアップされたのは自殺ではなく不法投棄であり、あまつさえ政争のニュースと重なってしまったせいで、ローカルのニュース番組でほんの少し報道されたに過ぎなかった。

警察が『不法投棄』の犯人を捜査しているが、未だ彼は疑われていないし、これからも疑われることは無いだろう。しかし、彼はこの上なく重い挫折を経験した。

アイヒマンの言葉

「一人の死は悲劇だが、集団の死は統計上の数字に過ぎない」

八月六日の日記

僕は『パレード』を書き続けようとしている。おかしいことだろうか？ 最も近い家族が自殺してまだ間もないのに、虚構を書こうとする気力があるというのは。

もしそう糾弾する人がいるなら、僕はその人に対して二つの言い訳をするだろう。一つ目。持論として、自分自身が不幸だったり切羽詰まったりしている時の方が小説は書きやすい。現実逃避というやつだ。二つ目。そもそも、僕の母が自殺したことで、世間一般が僕に対し立ち直るまでの猶予を与えてくれるならば、少しばかり愚図ってみるのも良いかもしれない。しかし現実はそのように甘くない。例えば、僕の母が自殺したことで、僕の新卒という資格の期限を延長してもらえるだろうか？ 母を失った可哀想な僕に対し、温情を感じて拾ってくれる大企業があるだろうか？ そんなことは有り得ない。むしろ母親が自殺したことは、僕にとって採用の篩にかけられる際に不利に働くことだって有り得る。例えばこんな具合に。

「こいつの母親は精神的な病が原因で自殺したのか。ということはこいつにも精神的な欠陥が遺伝しているかもしれない。可能性は低いだろうが、それでも不安な要因は消しておくべきだ。

よし、不採用」

……流石にそんなことは無いだろうか。

何にせよ、導き出される結論は『何も変わらない』というところだろう。ということは、僕は何も変わらず小説を書き続けるべきだし、将来に対する吐き気を催す不安も何も変わらない。

夏休みに入り、時間はたっぷりあるので僕は一日を小説の執筆と公務員の勉強でほとんど半分ずつ使い果たし、過ごしている。『パレード』は、どうも主題であるパレードから段々と離れてしまってきている気がする。最近思いついた挿話は、いよいよパレードとはまるで関係なくなってしまう。全体を統一する雰囲気無く、てんでバラバラに散らばっている奇妙な小説。まるで人間の一生のようになってしまいそうだ。

もしかしたら完結できないかもしれないという不安もある。少なくとも今年の学祭には間に合いそうにない。途中で歓声を諦めることは別に珍しくないし、実際今までにも大量の小説を完結させずに放りっぱなしにしてきたが、今回に限っては何故か、書ききれなかった時のことを考えると恐怖に襲われてどうしようもなくなってしまう。『パレード』を書き上げられなかったら、もう二度とどのような小説も書けないような気がするのだ。

僕は『パレード』に何かを期待しているのかもしれない。僕の内側から出てくるものに僕自身が期待するというのだから、これほどおかしい話も無いと思うのだが、僕が抱えている『パレード』への感慨は、その証左であるに違いなさそうだ。

しかし僕は僕の期待に応じられないだろう。僕は『パレード』を完成させられない不安と、そうになってしまう確信を併せ持っている。いつもそうだ。頭で思いついたとき、あらゆる小説は名作なのだ。ところが実際にキーボードを叩き、文字にして書き綴ってみると段々とその小説は粗や綻びを露わにしていく。僕の人生も、幼い頃に頭に描いていた頃は素晴らしく偉大なものだった。それを信じてここまで歩んでみたところ、次々と欠陥やバグが明らかになって今やこのザマだ。最早修復の利く段階ではない。リセットボタンも何処にもない。電源ボタンを押すにはまだ勇気が足りない。

もし僕が遺書を書くならどんなものを書くだろう？ 素人なりにも物書きを随分とやってきたのだから、少なくとも母親のものよりは面白いものを書きたいと思う。

八月九日の日記

〈八月九日の日記〉

僕が初めて小説を書いたのはだいたい十年前、小学校五年生にまで遡る。当時僕は携帯電話を所持していなかったが、家にはパソコンがあった。友達にも何人かそういう奴がいて、僕は彼らとしばしばメールでやりとりをしていた。ある日、ある友人が長い長いメールを送りつけてきた。読んでみるとそれは、ギャグ混じりのファンタジー小説だった。今思えば拙い文章に拙い物語だが、元来読書好きだった僕はその小説をとて面白く読めたし、何よりこんなに面白いものを書けるその友人を、素直に尊敬した。そして自分でも何か書いてみたいと思い立ち、その小説を真似た、今にしてみればパクリと言われても仕方ないような、しかも友人のものより遙かに拙い小説を書き、その友人に送りつけた。寛容極まりない彼は、僕に「面白い」と言ってくれた。

それから十年、僕は小説を書き続けている。何故書き続けているのかはよく分からない。創作の手段が漫画や音楽などではなく、小説である必要性も、自分では解き明かせない。多分、僕には絵を描く才能や音楽を奏でる才能が人並みよりも乏しく、文章を書く才能だけが人並み程度にはあったからとか、単純に友人が最初に僕に提示した創作の手段が小説だったからとか、その程度のものなのだろう。

しかし、どうやら小説を書き続けているうちに、僕の中である種の期待が過剰に膨らんでしまったようだ。できることなら僕の小説で読者の心に影響を与えたい。のみならず、僕の小説が切っ掛けで何らかの形で現実世界が変異して欲しい。例えば、僕の小説のおかげで自殺者が一人でも減ればとても嬉しいだろうと思う。逆に、僕の小説のせいで自殺者が一人でも増えれば、それはそれでやはり喜んでしまうだろう。実際にはどちらも有り得ない。僕が何を書こうが世の中は関係のないところで回っていくし、小説を読んだ程度で動かされる心はつまらない自尊心や浮気的な感慨の部分に過ぎない。

それにしても、もしも十年前、僕に小説を書く楽しみを教えてくれた友人が遺書を書くなら、一体どんなに面白いものを仕上げるだろう。或いは、彼女が遺書を記すとすれば、一体どのようなものになるだろう。母の遺書を読んで以来、僕は別に死を望んでいるわけでもないのに、あらゆる人々の遺書を読みたいと思うようになっている。

最近彼女とよく喧嘩をするようになってしまった。彼女はいつも通りの彼女だし、僕も何も変わらず振る舞っているつもりなのだが、小さな切っ掛けでいざこざが生じてしまう。僕の方に心の余裕が無くなってきてしまっているのだろうか。来月の十六日は僕の誕生日だ。だからと言うわけでもないけれど、早めに仲直りしてしまいたいと思う。こんなこと、重たすぎて彼女に直接言えないが、僕が現在夏休みを潰して必死に勉強しているのは、ただ彼女のためと言っても過言ではないのだ。

メモ7

今、こうして僕がクーラーのきいた部屋でのうのうと下らない文章を書いている間にも、テレビで小学校三年生の女児が首吊り自殺をしたというニュースが流れた。いじめが原因だそうだ。この国において、十代の少女が死ぬ、その最たる死因は勿論自殺である。

本編への挿話6

ある国の首都で戦勝者達による凱旋パレードが行われている。同時期、別の国の首都では戦死した者達の遺影を掲げたパレードを催している。どちらのパレードにも沿道には観客が並び歓声を送っているが、どちらかといえば後者のほうが観客の表情が喜色に満ちている。

説明するまでもなくこの二国は軍事的に争った。そして一方は勝ち、一方は負けたのである。しかしその戦争は多数の者に不幸にするものではなかった。

何故なら、兵士達は全員、その国の引き籠もりやニート、そして障害者というような、いわゆる社会不適合者ばかりなのだ。彼らが全滅したところで国力が落ちるわけでもなく、むしろ国全体が引き締まることに有効である。また、その戦争は専用のフィールドで行われ、参加者は全員歩兵である。そのために著しい環境破壊を起こすこともほとんどなく、軍事産業には継続的な需要をもたらし、経済を潤すことにも役立った。

そうした、いわば仮想的な戦争は大多数の『真つ当な』国民にはオリンピック的なスポーツとして親しまれるようになった。このスポーツは、同時に人々の闘争本能を満たすため、世界から致命的な破壊や不幸を引き起こす戦争のほとんどを消し去った。

勝者、敗者に関わらず、戦争に関わった全ての国がパレードをする。戦勝国にとっては、勿論戦争に勝ったことを祝うためのパレードである。一方で敗戦国は、敗戦したものの、『社会に必要な人間を一人でも多く減らせた』事を祝い、遺影を掲げ、ヒーローのいないパレードを行う。どちらの場合でも観客はその国の土台を支える、故に人生の中で注目される機会の無い、サラリーマン等の社会の歯車が並ぶことが多く、彼らは戦勝者達にはこんな言葉を浴びせかけて鬱憤を晴らす。「次は死ね！」そして敗者の遺影には拍手をしながらこんな野次を飛ばす。「もう一回死ね！」

しかし山のようにいる不適合者も、次々と死んでいけばやがて尽きてしまう。そこで、国によっては産まれた子供に敢えて不適合者となるような教育を施し、いわばプロの引き籠もり、プロのニートなどを育てて戦争に向かわせる事もある。彼らには幼い頃からインターネット環境やゲーム機、マンガなどのインドア趣味の道具を多く与えられ、他人との接触は最小限に抑えられる。彼らはほとんどそれだけで不適合者となり、今日も戦争に派兵され、一般大衆を喜ばせる娯楽のタネになる。

九月九日の日記

夏休みが終わり、学校が始まってしまうことに絶望した小学生や中学生の自殺が相次いでいるようだ。僕が彼らと同じ年の頃、自殺なんて手段を考えたことは一度も無かった。もっと早くに思いついておけば良かったのかもしれない。

僕の夏休みもあと半月もしないうちに終わってしまう。公務員の勉強は進んでいるのか、いないのかよく分からない。終わりが見えないからだ。

十月になれば民間企業の就活が本番に入る。大学で言われたままに就活サイトに幾つか登録してみたところ、パソコンと携帯にほとんど毎日そういう類のメールが来るようになった。いちいち無視し続けているが、そろそろ直視しないとイケないのだろう。

あと一週間で二十一歳になる僕はもうとっくに酒も煙草も嗜めるし、ツタヤのアダルトコーナーにも大手を振って入ることができる。しかし、逆に言えば僕はまだ学生だから、社会的な資格はその程度のものしかない。よく言われるものだ。「社会に出れば分かる」「大人になれば分かる」「子供を持てば分かる」

一体何がわかるのだろうか？ 彼らがそういった台詞を、免罪符的に使っていただけだという事実だろうか？ それとも、ただ社会に出ただけでそんなに理解できることがあるのだろうか。僕にはまだ分からない。出来れば分かりたくもない。分かったら分かったで、次代に継ぐことになってしまうからだ。

子供だけは作らないようにしよう。僕らのように、腐った卵扱いされるのはあまりにも可哀想だ。そして腐った鶏が新鮮な卵を産めるはずがない。腐った精子は新鮮な卵子をも腐敗させてしまうだろう。適当な気分でゴムを付けずにセックスして、三割の確率で妊娠し、その時はとりあえず喜んでバカみみたいな名前を付けて、母性だの父性だのに目覚めてみたりして、何も分かっていないのに、ペットの飼い主感覚で親になって、それで、赤ちゃんポストとか、虐待とか、ネグレクトとか、ニートとか、よくわからないことになって。

とりあえず考えないでおこう。セックスのことはセックスの最中にでも考えれば良い。社会のことは社会に出てから考えればいい。来週の誕生日は久々に彼女に会える。彼女に会ったら、どんな形でもいい、ただひたすら癒されたい。

気がつくと男は白いリノリウムの床に伏していた。そこは体育館程度の広さがある空間で、三方は白い壁に囲まれていて、残りの一方は直角の崖になっている。崖の底は奥深い深淵になっていて、どこまで続いているのかも分からない。天井には真っ赤なバラがひしめき合って咲き乱れている。

壁に巨大な機械が据え付けられている。男よりもやや背の高いその機械からは太い管がまっすぐに伸びていて、それは天井と繋がっている。表面は白くややざらついていて、中途半端な長さのベルトコンベアが男の膝ぐらいの高さから真っ直ぐ前方にとびでている。

しばらく、空間は静かに佇んでいた。男はなんとか脱出を試みたが、唯一の手がかりになりそうな機械には入力装置がない。どう考えても現実では有り得ないような世界だし、どうせ夢ならば、と崖から飛び降りてみることも考えたが、底が見えないせいでなかなか踏ん切りが見えない。

そうやって真下を眺めていると、深淵で何かが動いたような気がした。冷えた風が男の顔面に吹き付け、彼は思わず後じさった。何が動いたのか分からない。巨大な顔のような気もするし、節足動物のようだった気もする。

その時突然、機械が大きな音を立てて動き出した。ベルトコンベアがカタカタと回り出す、やがてその上に機械から何かが吐き出された。恐る恐る近づいて確認してみると、それは臍の緒が付いた全裸の赤ん坊だった。

赤ん坊は平和な寝息を立てて眠っている。男が呆然と立ち尽くす眼前で赤ん坊はベルトコンベアに乗り、やがてその端に辿り着いた。そのまま床に落ちそうだったのを、男は慌てて拾い上げた。男の子だ。両手で抱きかかえたまま男が戸惑っていると、再び機械が赤ん坊を吐き出した。今度は女の子だ。ベルトコンベアを流れる。男は仕方なく男の赤ん坊を床に寝かせ、女の子を拾い上げた。

そうやって、赤ん坊は次々と機械から出てきた。彼らは全員すやすやと眠っており、泣き出す気配は無かった。男は順々に彼らを床に並べ、それはやがて横一列を満たしてしまった。

男は自分が置かれた境遇をまるで理解できなかった。薔薇の天井。赤ん坊を生み出す機械。崖の下の深淵。解決の手がかりになるものは一つもない。

そういえば、『何か』はどうなっただろう。ふと気になって男は崖に近づき、そして悲鳴をあげた。『何か』がこちらに向かって上ってきているのだ。輪郭が曖昧で、近づいているはずなのに実体がどのようなものなのか一切掴めない。確かなことは、それは色が黒く、男の二倍ほどの体躯を持っているということだけだ。それが今、崖をつたって上に向かって近づいてきていた。

男は靴を脱ぎ、『何か』に向かって投げつけた。それは見事に命中したらしく、『何か』はほんの少し後ずさった。しかし、すぐに体勢を整えて上り始めた。男はもう片方の靴を投げ、着ていた衣服を投げおとした。そのたびに『何か』は少し退くが、再び上り始める。いよいよ男には投げるものがなくなった。

『何か』は着実に迫ってくる。男はふと赤ん坊に目をとめた。男が『何か』に集中していたせいで、ベルトコンベアの下には幾人かの赤ん坊が落ちて折り重なっている。しかし、彼らはそれ

でも泣かずに眠ったままだ。男は傍らの床で眠っていた赤ん坊を拾い上げ、そして『何か』に向かって投げつけた。

衣服よりも重量があるせいか、効果は大きかった。男は次々に赤ん坊を投げ落とした。彼らは無言で、眠ったまま落ちていき、『何か』に当たって跳ね返る。そしてまた深淵に向かって落ちていく。床に並べた赤ん坊が尽きると、男は急いで機械のもとに走り、そこに積み重なった赤ん坊を投げた。機械が赤ん坊を吐き出すペースは、まるで『何か』を退けるためであるかのようだった。

しかし急に機械が大きく震え、そして止まった。中で赤ん坊が詰まったのだろうか。男は機械を殴ったり蹴ったりしたが効果は無い。気づけば背後に『何か』がいた。黒い『何か』は男の顔をのぞき込むような仕草をした。その瞬間、男は『何か』の表面に浮かび上がる幾人もの女の笑顔を見た。そして次の瞬間、男は『何か』に取り込まれ、深淵に向かって引きずり落とされた。

男は恐怖に駆られて泣き喚いた。落ちていく中で彼は徐々に退化していった。そして底に到着する頃には、男は臍の緒をつけた赤ん坊に変わってしまっていた。彼はなおも泣き続けた。いつの間にか落下は終わっていて、彼の周りは暗黒に包まれていた。直後、何者かの手が男の頭を抱え、光の方へと引きずり出した。

そうして、彼は無事にこの世に産まれました！

九月十五日の日記

彼女が僕に別れを切り出した。彼女は少し前から僕との付き合いを終わらせることを考えていて、もう既に次の目星もつけているのだそうだ。

僕にとっては少なからずショックだった。確かに最近彼女との喧嘩は絶えなかったが、それでも……変な言い方をすると……安心して喧嘩ができていたのは、何があっても彼女との縁が切れることはない、僕自身が勝手にそう思い込んでいたからだった。しかしその思い込みは、あっさり打ち砕かれてしまった。今となっては、つい一週間前に書いたばかりの日記がブラックユーモアのようだ。ようやく立ち上がり、歩き出そうとしたら目の前に見えない壁があったような感じ。立ち上がろうが立ち上がるまいが薦めなかったのだ。まるで僕らの世代そのもののような馬鹿馬鹿しさだ。

近所のカラオケに行き、個室でしばらく話し合った。

「別れるつもりは無かったの」と、まず最初に彼女は言った。それから急に激昂したように表情を歪め、声を荒げた。「だって仕方ないじゃない。貴方はお母さんが死んでから、ずっとずっと卑屈なままで。そりゃ私だって支えてあげようと思った。何度も何度も慰めた。でも、私はカウンセラーじゃないのよ、精神科のお医者さんじゃないのよ。ずっとずっと、そんなことばかりしてられるわけじゃないじゃない」

言われてみれば確かに、ここ一ヶ月ほどは彼女に頼るといえるか、慰められるような機会も多かったような気がする。とはいえ、彼女が言うほどに病んでいたつもりもない。むしろ僕が彼女に慰めてもらった数は、彼女が僕に慰められた数に比べれば天と地ほどの差があるはずだ。しかしそんなことを言ってもどうにもならない。結果として、彼女はそういう僕を甲斐性が無いと評価し、嫌気がさしたのだから。いくら情状酌量を求めても、すでに判決は出てしまっている。

しかしどうしても納得できないのは、彼女が僕と別れるよりも前に男を作ったという点だ。

「浮気をするぐらいなら先に、別れを切り出して欲しかった。それだけなんだ」と、僕はささやかな反抗を試みた。「そうすればこんな厄介な話し合いをする必要もなかったし、僕は貴方を責めずに済んだ。順序さえ違えなければ、手続きさえ踏めばよかったんだ」彼女は黙り込んでしまい、結局それに対する回答は得られなかった。

推測するに、彼女は保険をかけていたのだと思う。独りでいる期間ができてしまうことに怖れを感じ、もしも新しい男が見つからなければ彼女は僕との別れを切り出さなかったか、もしくは僕に猶予期間を与えてくれていたのかもしれない。しかし、新しい男はすぐに見つかった。当然だ、僕の彼女は可愛いし性格も良い。

大学生のカップルが別れるなど、世間的に珍しいことではない。そして、その後すぐに別の異性をくつつくことも、まああることなのだろう。今の時代に結婚まで貞操を守り続けるなどと言えば嘲笑を浴びるだろうし、顔面劣等者の言い訳だと思われてしまうかもしれない。現に僕は彼女のおかげで非童貞になり、彼女は僕のせいで非処女になった。彼女はこれから新しい男と付き合い、様々なことをするだろう。それは僕の関知できることではないし、すべきことでもない。しかしどうしてもそんなことを思い浮かべてしまうのは、僕が現実とは関係ないところで持ち続けているコンプレックスのせいに違いない。

もしかして僕は、あらゆる物事を深刻に考えすぎているのだろうか。就職や、恋愛や、結婚なども、もうちょっと簡単に解釈した方が良いのだろうか。大体、この国では大多数の人間がのらりくらりと生きてこられているのだ。だから凡人という名の多数派である僕にも出来るはずなのに、いつも肝腎なところで知識もないのに考え込み、そして立ち止まってしまう。僕は、肉体的には童貞でないかもしれないけれど、社会的には徹底した童貞なのだ。知ったかぶりで社会の怖さを喚き立て、自分が社会に出ることを極限まで怖がり、後ずさろうとする。そんな僕を、社会非童貞はこうやって罵るだろう。「童貞のくせに」「童貞のくせに」。僕の知識が間違っているようにいまいが、彼らは圧倒的な優位性をもって罵り続けるはずだ。「童貞のくせに」「童貞のくせに」。

彼女と別れた帰り道、ゲーム屋に立ち寄ってポケモンの予約を取り消した。取り消してどうするつもりなのだろうか？ 彼女を失った現在、僕には完全に生きるための指標が無くなってしまった。これは、一時の気の迷いなのだろうか。半年もすれば、新しい彼女を見つけようとするまでに立ち直るのだろうか。勿論そうするのが正しい人間なのだろうし、いちいち歩みを止めることは甘えでしかない。

そうだ、母親が自殺したのも、彼女と別れることになったのも、就職ができないかもしれないのも、公務員試験に落ちるかもしれないのも、全部全部僕自身の甘えのせいだ。悪いのは全部僕だ。僕が甘えているからだ。社会は悪くない。こんな時代に生まれたことが、ゆとり世代という名の谷間世代に生まれたのが、そもそも甘えのせいだったのだ。何もかも僕が悪いんだ。自虐するのはなんて気持ちの良いことなんだろう。今なら死んでいった母の気持ちが分かるような気がする。今なら、とても面白い遺書が書けるような気がする。

本編への挿話8

彼は面接官の前に笑顔で座っていた。彼はその面接に自信があり、自分が落ちてしまうことは微塵も考えていなかった。

「では、貴方の特技を教えてください」

まだ若い面接官が真面目な顔でそう言うと、彼は明朗な声でこう答えた。

「はい。私は一目で女性が処女か非処女かを見極めることができます」

時間が凍り付いた。面接官が軽く嘲るような目で彼を見据えた。

「……その特技が当社で働く上でどのように役立つのでしょうか」

「はい。社員の誰が処女で、誰が非処女なのかを判別できます。それは、きっと社内での恋愛調査、浮気調査などにも役立つのではないのでしょうか」

……当然ながら彼は面接に落ちた。彼は自信家である以上に、正直者過ぎたのだ。ついでに言えば、彼を面接した若い面接官は、女性だった。

後に彼はこう述懐している。「あの面接官、絶対に非処女だぜ」

メモ8

「クルクルクル……」 (モンスターボールを格好良く回す音)

「シュツ……ポンツ」 (ボールを投げ、中からポケモンが出てくる音)

「いけっ、ミュウツー！」 (高らかにモンスター名を叫ぶ僕の台詞)

こういうことを数十分、一人で喋っているといつの間にか快適に眠れる。あまりにもつまらないからだと思う。

九月十六日の日記

最期の夢を見た。いつか見た、あのパレードの夢によく似ていた。

あの時と同じように、僕はベッドの上から繁華街の只中に移動し、後方からやって来るパレードを待っていた。

しかしあの時と違い、パレードの行列は僕の前まで来ると急に歩みを止めた。全ての音楽が鳴り止んだ。先頭に立つ仮面の男が此方を見つめている。彼の後ろには何百何千の仮面達が何かの合図を待つようにしてじっと佇んでいる。

僕は彼らに向かってこう言った。「僕も連れて行ってくれませんか」

それを聞いた男はゆっくりと片手を仮面に遣った。そして、歯車の形をしたそれを取り去った。

中から、僕の顔が現れた。彼の仮面がアスファルトに落ちたと同時に、パレードに参加している全員が自らの仮面を取り外した。老人も子供も、男も女も関係なく、仮面の下から出てきたのは、全て僕の顔面だった。

彼らは皆笑っていた。何千人もの歪な僕達が満面の笑みを浮かべていた。つられて僕も笑った。歯車を取り去った僕自身の笑顔を、僕は美しいとさえ思った。

小さい女の子の僕が先頭に走り出てきて、僕に指揮棒を手渡した。彼女が行列に戻っていくと、どこからかドラムロールが響き始めた。パレードが再開される合図だ。高らかに鳴り渡る管楽器。激しく打たれる打楽器の音が心臓を内側から震わせる。僕はパレードの先頭に立ち、出鱈目に指揮棒を振りながら歩き始めた。

振り返ればそこに、数多の僕がいる。何千人もの僕を従える、僕独りのパレードはとても気持ちよかった。僕は最早、黄色い歯車ではない。僕は望みを果たしたのだ。あらゆる他人との接触を断ち切り殻に閉じこもり、その上で僕にはまだ、こんなにも沢山の仲間がいる。僕は僕自身に対してあまりにも自由だった。

そうやって僕らのパレードは、いつしか繁華街を通り抜け、森を越えて山を越えた。僕らは何処にでも行ける。何処まででも行ける。気づけば目の前に崖があり、遙か下に大海原が広がっていたが、僕は気にせず前進し続けた。後ろに続く僕は、全員ついてきてくれている。何故なら、僕らはその気になれば空を歩くことが出来るからだ。そしてその気になるかどうかは、指揮棒を握る僕の心にかかっている。

僕は神秘的な快楽を覚えながら、虚空に向かって脚を振り上げた。

メモ9

パレード……終わってしまった後の空白。誰もいない道路。誰もいない街。何処かへ帰ってしまった観客。台風のように過ぎ去っていったパレードは、もしかしたら希望や人々を奪い去ってしまったのかもしれない。ハーメルンの笛吹き。死の行進。デスマーチ。肉体の歯車。望まなくてもフィナーレはやってくる。

後書き

曾てゲーテという作家が『若きウェルテルの悩み』という小説を著した時、劇中のウェルテルの悩みに共感した若者達が次々自殺するという、所謂ウェルテル効果というものが起きた。そのせいで『若きウェルテルの悩み』は幾つかの國で発禁処分を受けたという。

今では、小説が発禁処分を受けるということはほとんど有り得ない。この国では表現の自由が保障されているから、『若きウェルテルの悩み』も勿論書店に並んでいる。

しかし、もし仮にゲーテが現代の作家で、現代の社会に合わせた『若きウェルテルの悩み』を著したところで、曾てのウェルテル効果のような自殺騒動は起こりえるだろうか？ 私は起こりえないと思う。表現に関する自由の保障は、一方で表現そのものの力が減退してしまった証左でしかない。それが良いことなのか喜ばしいことなのかどうかは分からない。

ただ、現実の一つ言えるのは、この国では別にウェルテル効果が起きなくても、毎年多数の人間が自らを殺しているという統計的なデータのみである。

私はそういった社会規模の騒動が小説によって起きても構わないと思うし、むしろ起きるべきだとさえ考えている。しかし現実にそのようなことは有り得ない。現代人のどこにたかだか表現物にいちいち心を痛める余裕があるだろう？

その意味でこの小説も空から降ってきたマネキンのようなものでしかないし、私だってそんなことは、書く前から自覚している。自意識過剰を押し通せる時期はもう過ぎてしまった。何より私は、あらゆる物語の書き手よりも、遙かに劣るものしか書けていないのだ。それは挫折や諦観と表現すべきものなのかもしれないが、私にとっては再認識に過ぎない。

私は最早この小説に何の期待も掛けるつもりは無いし、出来ることならこの小説が誰の目にも触れないことをすら願っている。その時この小説の意味……無意味という意味……が達成されるような気がするのだ。生まれつきの盲人が視界というものをそもそも認識していないように、この小説も認識されないことで初めてその必然性を満たすのではないか。

私の彼との関係が、現実と虚構の境界を越えたメビウスの輪を形成していることはまず間違いない。そう、私もまた、パレードの夢を見たのだ。気づけば背後から、私が頭に描き、文章に落とし込んだ通りの音楽が聞こえてきた。随分と遅い出迎えだ。できればこの小説を書く前にやって来て欲しかった。そうすれば、生き恥を晒さずに済んだというのに。

しかし、私にはあと一つ、遣り残したことがある。それは勿論、遺書を書くことだ。滑稽なド素人物書きであるところの私が私自身への挑戦として叩きつけた滑稽な問題。私は私自身の期待通りに、滑稽な遺書を仕上げることができるだろうか。

問題

貴方の遺書を書きなさい。（自由記述 百点満点）